

# ニュースレター

2002年3月29日発行  
 関東学院大学 キリスト教と文化研究所  
 〒236-8501  
 神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号  
 TEL: 045-786-7873(研究所直通)  
 発行者: 森島牧人  
 (Director: Makito Morishima)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

## 第2報刊行に際して———所長より

主の御名を賛美申し上げます。時が経つのは早いもので、「キリスト教と文化研究所」が開所して早5ヶ月が経過致しました。私共の研究所は、まだまだ手探りの状態ではありますが、少しずつ会議、委員会、プロジェクト等を発足し、活動を本格的に始動しました。

今回のニュースレターでは、今年度の活動報告に加え、開所式にご講演下さった隅谷三喜男氏の「日本社会とキリスト教」の内容を、多くの方々のご要望にお応えする形で、掲載することに致しました。来年度も「キリスト教と文化研究所」の活動が祝されたものとなりますよう、お祈りによるお支えを宜しくお願い致します。

## 日本社会とキリスト教

東京大学名誉教授 隅谷 三喜男

大変貴重なご紹介をして頂きまして恐縮であります。この校地に建物が作られ、その中に「キリスト教と文化研究所」が誕生することになったということをお伺いし、それに多少ともふさわしくありたいと思ひまして、「日本社会とキリスト教」と題しました。

日本においてキリスト教が社会的にどのような特性を持っているのか、教会の中で責任を持っておられる牧師先生とか、あるいは神学者の人達は、教会の礼拝、神学についてとかであれば良く勉強され、いろいろ書かれていて、私も多少勉強させて頂いているのですが、私は社会科学の世界で勉強して参りましたので、本日は、日本の社会の中



でキリスト教がどういう役割を持っているのか、外国にとってどういう特色があるのかを少しお話ししたいと思ったわけでありませう。

さて、少々脱線をいたしますが、私は戦争が終わってから、大学に戻って、経済学の勉強をする過程で当時の若い神学者の方々と議論する中で私自身の考えを記してみようと思って「近代日本の形成とキリスト教」という小さな本を出しました。最初に出たときは大型の本でしたが（笑）新書版になって今でも出ております。その中で明治初年からキリスト教がアメリカの宣教師を中心に入ってきて、その影響を受けてキリスト教徒、日本のキリスト教会というのが生まれた構成というのがどのようなものであったかを書きました。それ以来、続編というものを書かなければならないかなと思いつながら今日まで書かないで参りましたが、今日はその続編にあたる、20世紀における日本のキリスト教会というものが日本文化とどういう関係を持って展開してきたか、ということについて少しお話ししたいと思います。

歴史的なことをごくごく簡単に説明すると、1889年に日本国憲法が制定され、一応信教の自由がその段階で法律的には認められました。それまでキリスト教は公認の宗教ではなかったわけですが、ここで一応認められました。しかし、実態的にどうだったのかということになりますと、憲法発布の翌年に教育勅語というものが出されました。若い方はあまり教育勅語に関心がないかと思いますが、戦前に小中学校の教育を受けた方は、私もそうですが、教育勅語を暗証させられたのですね。

この教育勅語というものが、日本の社会を近代化することを否定する思想的な基盤というものに展開をして参りました。教育勅語は、各小学校から中学、全部の学校に配布されまして、式典があ

る度ごとに教育勅語が読まれました。教育勅語というものが日本人の思想に明確な規定を与えることになった。今日、皆さんには教育勅語にどういふ影響があったか、天皇が何を言ったか等ということは、新聞に記事が出て翌日は忘れてしまうというように考えられるかもしれませんが、教育勅語は日本人に大変な影響力をもたらしました。日本人の基本的な思想体系はこの教育勅語によって立ち上げられたといひましょうか。その上に立って教育が行われたということは、その後、1890年から1900年の10年間、日本のキリスト教会は非常な打撃を受けました。教会で語ることは教育勅語と異なるということであるいろいろな出来事が起きました。非常に大きな問題になったのが、内村鑑三の高等学校での教育勅語事件でありました。内村鑑三は天皇の勅語にどう頭を下げてよいか困り、あまり頭をきちんと下げなかったのであります。そのことが大問題になりまして、内村鑑三は当時の（今日の東京大学教養課程）高等学校から追放されることになったわけですね。その後、彼は数年間非常に苦難の生活を致します。それから10年間、日本のキリスト教はなかなか伸びません。今日は戦争前の統計的な数値を皆さんに配りました。信徒数というのをきちんと見ますと、日本のプロテスタント信徒数は大体2万3千人という数で進展しません。増えない。

今日皆さんにお話ししたいのは、その後の日本社会においてキリスト教会はどういう姿で展開したかということです。

実は1900年、ちょうど20世紀のはじめころから日本キリスト教界はもう一度活気を取り戻しました。明治の30年前後、日本の社会が急速に展開しました。どうしてかということ、日清戦争（1894～95年）の後、日本社会は急速に展開致し

まして、県庁所在地のような都市には裁判所が置かれ、新聞社が出来て、いろいろな小さい会社等が急速に成長しました。近代都市には新しい知識層というのが形成されて参ります。島崎藤村とか徳富蘆花など、明治の文学者によって近代的な小説というものがたくさん書かれ、雑誌等も現れてきました。日本人の生活様式というものが、特に都市で一つの新しさを持って形成されるようになってきたのです。歴史の本にはあまりはっきり書いてありませんけれども、丁寧に読んでいきますと、日本の近代というものが20世紀の初めから形成されてきたということがお分かりになると思います。

今までの日本は家族的、国家的な国民思考で「個人の自覚」「個」というものが注目されないうえに、ところが、そういう状況の中で若い世代に「個」の思想というものがかなりの勢いで入ってきたのです。その時にキリスト教会の中にも新しい息吹が生じまして、東京では上野公園でキリスト教講演会というようなものを催して野外集会を開きました。それまでそういうことをしたことがないのですが、そうすると、かなりの人がキリスト教はどんなことを言うのかと立ち止まって聞くという、このようなことが急速に広まっていった。野外伝道というものが全国的に展開していきました。信徒の数から言いますと、明治の32年頃、2万3千人くらいであったのが、急速に信徒の数が増えていったのです。1910年頃には信徒の数が倍以上になったのです。このように大変な勢いで信徒層が広がっていった。それはどうしてかという、近代的な教育というのがだんだんと広がってきて、日本に新聞、雑誌のようなものも広く定期的に刊行されるようになりまして、読むようになったからです。

日本の教育制度も展開しまして明治の30年代

の終わり頃、義務教育の修学が男子の5%、女子も同じくらいです。そういう中で、日本のキリスト教に対する抵抗が非常に少なくなりました。それでキリスト教は20世紀に入りましてずっと着実に信徒の層を伸ばしていくわけです。歴史的にそうだったかということは皆さんも調べているとは思いますが、しかし、これは日本のキリスト教会の社会的特色であります。

明治の前半期、キリスト教界は農村に伝道しまして、農村にもかなりの教会がぼつぼつ立つようになってきました。その地主さんだったり、その村の有力者だった人が信徒になって自分の故郷に帰って自分の家族や親族等、そういう者をクリスチャンにしなから伝道をして教会を作っていくということがありました。けれども、明治の30年代以降、20世紀の初めに農村教会は展開の幅がそれ以上広まらず、発展が停滞、更には後退するのです。そうすると、今度は都市に教会が出来るのです。これも日本のキリスト教会の特色であります。他の国には出てこない。韓国は戦前農村教会が中心だったと言って良いでしょう。韓国、中国の伝道は、都市になかなか入りません。今でも韓国は農村の至る所に教会があります。それはなぜかというのも一つの問題ですが、日本は教育勅語の影響で農村にキリスト教が入ることが非常に難しかったのです。それに対して、アジアは教育勅語のようなものがないので有力者の信仰が入りやすいわけです。都市は伝統的な思想が強い。韓国、中国は儒教文化がかなり残されていました。農村の辺りはその思想が弱い。というわけで日本には都市に教会があるわけです。このような特色は他にはちょっと出てこないです。

日本のどういう社会層が比較的多くキリスト教徒になったか、どういう人が信徒になったかですが、

比較的知識層の人たち、教育を受けた人達が多かったのです。知識層の中にキリスト教が入ってきたということです。知識層を基盤にしたキリスト教というのが日本の特色です。教会を尋ねてくるのは高校の生徒とか大学生で、そういう青年層が洗礼を受けるわけです。日本のクリスチャンはほとんどの場合、青年期に洗礼を受けるわけです。青年期にいろいろ考え、本を読み、仲間に集会や教会に誘われたりして教会に出入りしているうちに牧師に捕まり（笑）自分で決断して洗礼を受けるわけです。当たり前なことではないかと思われるかもしれませんが、他の国ではあまりないのです。他のキリスト教社会では生まれた時からキリスト教なわけですから、青年期に洗礼を受ける人が多いということは珍しいわけです。ところが日本のクリスチャン家庭では半分以上の人が幼児洗礼を受けていません。というわけで、ほとんどの人が青年期に洗礼を受ける。青年期というのは、日本の宣教に大変重要な対象時期だということです。私は、両親がクリスチャンです。大変厳しく育てられました。しかし、洗礼を受けたのは当時の中学の終わりくらい 16歳の時です。比較的早いほうかもしれませんね。

女子の教育についても少しお話ししなければなりません。女子教育というのは一般に非常に軽視されました。ただ日本の文化的歴史の中で一つの特徴ではないかと思うのが、明治初期に教養を身につけた女性がかかり出てきたのです。これは韓国や中国ではほとんど見られないことです。例外中の例外です。ですから、明治になりまして小学校教育は日本の政府が女子も教育を受けなさいと言ったのですが、男子が 50%の修学率に対して女子が 20%でした。女子のほうはずっと低い。男子のほうは進学したけれども女子は小学校どまりでした。

その時に女子教育に注目し、自分たちの使命だと考えたのがキリスト教のミSSIONナリーでした。そして塾のようなものを作って女子に対する教育を始めました。明治の 30年から 40年ごろ中等教育の女学校がかなり建てられましたが、そのほとんどがキリスト者、婦人の宣教師が作ったものであるということです。その中で女子は健全に育って、今日でもその多くは受験校になったりして高い評価を受けていますが…。政府は女子教育に対して非常に不熱心でした。

ちょっと話は飛びますが、明治の終わりから大正にかけて女子大学が作られました、それは名だけで実態は専門学校のようなものでした。文部省は女子の本格的な大学を認めませんでした。大学を卒業しても学士号を出すことを認めませんでした。それだけ差別があったのです。その差別を乗り越えるために良く働いたのがMISSIONナリーだったわけです。そういう意味で日本社会における女性信徒の養成というのもMISSIONの女学校というのが非常に大きな役割を果たしたわけであります。

男子の場合は、自分の家を離れて都会に出てきて勉強する中でクリスチャンになり、結婚する、というパターンに抵抗がなくなってきます。しかし、女子がクリスチャンとして生きるのはなかなか難しかったのです。女学校に入ってクリスチャンになっても家庭はクリスチャンではないですから非常に苦勞をしました。女子の学校はあったにもかかわらず男子のキリスト教学校はごく少数しかありませんでした。

そこで 5番目の最後の課題に移って参りますが、この日本では、今申しましたようにキリスト教に対する解放感が出てきて青年期に洗礼を受ける者がかなり出てくる。ところが、一つの大きな問題をはらんでいるのです。男子の信徒の場合ですが、

学生の時に教会に行って仲間と交流し洗礼を受ける。ところが卒業してからが問題なのです。半分近くの学生は学校を卒業と同時にキリスト教も卒業してしまう現実があるのです。キリスト教を卒業というのはありえませんからキリスト教を中途退職してしまうのです(笑)。クリスチャンは日本社会の中では1%と非常に少数派です。非常に少ないです。100人の従業員を持つ会社で1人いればいい方です。1000人の会社でも10人なんて滅多にないです。いたとしても支店などに分かれてしまうでしょう。最近では1%さえきりつつあります。学校では仲間がいたけれども、社会ではないのです。非常に概説的に言えば、家庭は仏教社会で、社会は神道社会です。本当に神道を信じている人が社長なり重役にどれくらいいるのか甚だ怪しいのですが、日本の社会では家を建てる前に神主さんと呼ばないと何となく落ち着かないものがあるのです。日常的に神道の信念を持っている人はごくごく少数です。それが日本社会です。家庭では仏壇に朝からお経をあげ、お供え物をするをお嫁さんが強制されてお経をあげなければならない。これが抵抗できないのです。「私は嫌だ」等と言ったら離縁されてしまうかも知れない。それが日本の娘さん達の非常な苦勞であります。ですけれども、女性信徒のほうが男性信徒よりも芯があります。男性は、就職して入った会社の上司に土曜の夜誘われて飲みに行ってしまうと、翌朝になって教会に行こうと思っても教会の敷居が高く感じてしまう(笑)そういう現実があるのです。クリスマスなどには娘さんと一緒に出て来たりしますけど。こういう事でいいのかと思うのですが、大学時代に受洗した圧倒的多数の人が3~4年経つとたいは日本社会の伝統的な生活様式の中に埋もれていってしまうのであります。そうしますと、教

会にだんだん入りにくくなります。そのうち10年、15年経つと、別張会員になってしまう。(笑)更に5年、6年か経つと別張からも外されてしまうというわけでありませぬ。

その段階について一つ付け加えますと、女性は強いです。女性は仏教徒の家にお嫁に行っても義理のお母さんが亡くなったりすると、抑圧がなくなり「私教会に行く！」なんて言って教会へ行きます(笑)。

男性は信仰を頭で理解し受け止めているので社会生活の中で混乱してしまうとキリスト教から離れていってしまうけれど、女性は強くて心の中で信仰を受け止めているのです。

最後に受洗者年齢別構成の推移のことを説明して終わろうと思うのですが、戦争が終わってから、社会が混乱し洗礼を受ける人が非常に多かった。けれど、だんだんと減ってきているわけです。男女比を見ると女性のほうが男性の倍ほど洗礼を受けております。

問題は年齢別ですが、はじめは先程申しましたように10歳代の後半から20歳代の、青年層の入信者が多かったのですが、近年は60歳代から70歳代と高齢の方の入信が増えてきて、逆に青年層は減っているということです。これは、日本のキリスト教学校はキリスト教との関係も含めてそれがキリスト教学校にとっては最も重要ではないのか、現代青年学生が何を考え、どう生きようとしているのか、現代のどういう問題と照らし合わせて考えたら良いかということです。

20世紀の問題を非常に大雑把に提示して私の講演を終えたいと思います。

2001年10月13日開催の開所記念式典講演をテープからおこしたものです。

## 「いのちを考える」 研究プロジェクト活動報告

私たちの研究グループは生命の問題を取り上げ、現在のさまざまな諸問題（例えば、先端医療技術とバイオエシックス、脳死、安楽死など）とキリスト教倫理を比較検証して研究を進めていくことを目的としています。現在の担当は、松田所員、L.G. ボンド所員、西原所員の3名です。

今年度の活動としては、小川圭治学院長の「生と死 - 宗教学の視点から - 」という講演内容を掲載したY.M.C.A.の小冊子を共に読む「読書会」と称した学びの機会を設けました。

来年度の活動計画案としては、ゲストを迎えたシンポジウムを開催し、多くの方々と共に「いのち」の問題について分かち合えればと考えております。

## 「奉仕教育の課題と実践」 研究プロジェクト活動報告

プロジェクト担当は、高野所員、影山所員です。今年度は3回に渡り、各自研究してきた事項について発表する場を設けました。新聞記事から読み取れる「奉仕教育」という言葉の意味とキリスト教における「奉仕」との違いについて様々な意見が出され、問題の重要性を再確認したところであります。来年度の活動計画を下記にまとめました。興味をお持ちの方は私共の研究プロジェクトにいらして下さい。

文部科学省の奉仕の実践指針について検討  
関東学院各校の奉仕教育と実践 - 建学の精神との関わりにおいて吟味

金沢区中学校、高等学校の奉仕教育実践例調査

全国私立小・中・高等学校の奉仕教育と実践例の調査

## 「キリスト教と日本の精神風土」 研究プロジェクト活動計画

プロジェクトの代表は精木所員。活動内容として計画しているのは以下の3点。

：宣教師達の伝道活動を通して見た日本の精神風土

：キリスト教から見た日本の仏教

：靖国神社をめぐる諸問題（いずれも仮題）  
尚、 に関して、鹿児島県における萬国バプテスト教会の伝道活動の追跡と鹿児島県におけるキリスト教活動の歴史と現状を調査する。

活動の形態として、最初の一年は掲げたテーマを「日本の精神風土」という大きなくくりの中で公開の勉強会を随時開きながら形にして行く予定である。

## 資料委員会活動報告

私共資料委員会のメンバーは、森島所長、藤原所員、L.G. ボンド所員、村椿所員の4名で活動を開始したところであります。今年度の打ち合わせにて決定した事項を報告致します。

- 1) 旧「日本プロテスタント史研究所」収集調査
- 2) 学院史、日本バプテスト史（含、横浜バプテスト史）、アメリカンバプテストの日本伝道などの関連資料発掘と収集
- 3) 収集資料の保管（第一次資料の保管、貴重文献の資料のコピーなどの保管）

今年度は研究所が開所したばかり故予算がなく、活動内容を話し合う計画段階で来年度を迎えますが、4月からは委員会を開催し、一年を目処に活動報告が出せるよう、メンバー一同資料収集に全力を尽くしていきたいと考えております。皆様お祈りに覚えて下さい。